

エッチュウバイの資源管理に関する研究

(第2 県土水産資源調査)

栗田守人・内田 浩

1. 研究目的

エッチュウバイ資源の持続的利用を図るため、ばいかご漁業の漁業実態を調査し、適正漁獲量、漁獲努力量等の提示ならびに漁業情報の提供を行う。これにより、本資源の維持・増大とばいかご漁業の経営安定化を図る。なお、ばいかご漁業全体の調査結果については、後述する2021(令和3)年の漁況に記載した。

2. 研究方法

(1) 漁業実態調査

島根県漁獲管理情報処理システムによる漁獲統計と各漁業者が記入した操業野帳を解析し、本種の漁獲動向、資源状態、価格動向および漁場利用について検討を行った。

(2) 資源生態調査

漁業協同組合 J F しまね久手出張所および同仁摩出張所に水揚げされたエッチュウバイについて、各銘柄の殻高を測定し、銘柄別漁獲量から殻高組成を推定した。

3. 研究結果

(1) 漁業実態調査

2021(令和3)年のばいかご漁業におけるエッチュウバイの漁獲量は89.9トン(前年比154%)、水揚げ金額は3,700万円(前年比125%)であり、前年に比べ増加した。また、平年(過去10年)との比較では、漁獲量は141%、水揚げ金額は117%といずれも増加した。

平均価格は412円/kg(平年比82%)であり、過去10年間で最低の平均単価であった。銘柄は特大、大、中大、中、小及び豆の6銘柄であり、特に小型銘柄は比較的高単価で取引される。しかしながら、小および豆の平均単価はともに537円/kgに留まり、過去20年間で最低の平均単価を記録した。平均単価が平年を大きく下回った理由は、新型コロナウイルス感染症の影響による販売価格の低迷によるものとの意見があった。

利用した漁場は、江津沖から島根半島沖の水深190~210mの範囲に集中しており、近年はほぼ同様の範囲で操業している。

(2) 資源生態調査

資源状態の指標となる1航海当たりの漁獲量(CPUE)は1,198kg(平年比171%)であった。1989(平成元)年以降では最高のCPUEであった2019(令和元)年(906kg)を超える過去最高のCPUEを記録した。

1航海当たりの漁獲個数は22千個(平年比159%)であった(図1)。近年は1航海当たりの漁獲量および同漁獲個数ともに増加傾向であり、資源は高水準にあると考えられる。

漁獲物の殻高は36~118mmの範囲であった。2016(平成28)年以降40~80mmが平年に比べて増加傾向を示していた。しかし、2019年からは逆に低下傾向となり2021(令和3)年も同様の傾向が見られた。小型群の減少は将来の資源低下に繋がるため、今後の資源動向については注意が必要である。

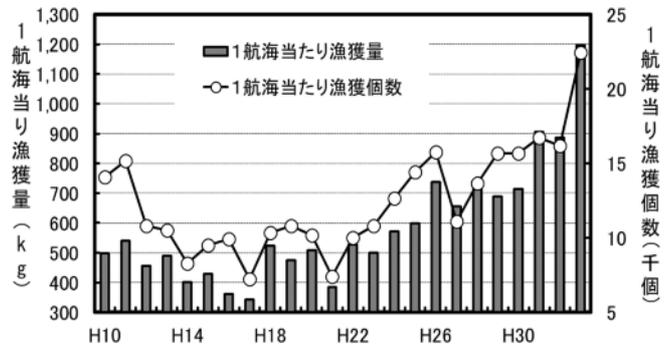


図1 1航海当たりの漁獲量および漁獲個数

4. 研究成果

調査で得られた結果は、島根県小型底曳網協議会ばいかご漁業者部会で報告した。調査結果は島根県石見海域におけるばいかご漁業の資源管理計画に基づく自主的管理措置である上限漁獲量の設定等の検討資料として用いられ、同海域のエッチュウバイ資源の持続的利用の推進に役立てられた。